

一緒にシューズ・ドリームを

東京で休校「靴作りの学校」 浪速区で再開へ

靴作りの学校として東京・浅草で半世紀近い歴史を刻み、昨年に休校した「エスペランサ靴学院」が10日、大阪市浪速区で再開する。尽力したのは卒業生の靴デザイナー、大山一哲さん(48)。「アフターコロナも見据えつつ、足元から世界を輝かせるシューズ・ドリームを一緒に追いかけて」と意気込んでいる。

厚い皮革を裁断する革切り包丁。近年は年間十数人が学んでいながら、入った製用用のマシン。学院。たという。だが、2019年、母体のが移転する大阪市浪速区の職業訓練施設「A(エー)ダッシュワーク創造館」の一室には、靴作りのためのさまざまな道具や機械が運び込まれた。業界で「エスペ」と呼ばれる学院は1973年、皮革産業が盛んな東京都台東区東浅草に開校。学校教育法に基づかない1・2年制の私設学校で、1千人を超える卒業生が輩出

「コロナ禍で価値観激変した時代だから、新たなチャンスもある」

を学び、「歴史ある靴職人の教育機関は社会的資産」との思いがあった。長年、靴デザイナー養成講座の講師を務めた大阪職業教育協働機構に相談して、機構が運営する「Aワーク創造館」に学院を移転し、受講生を募る同意を得た。引っ越し費用や再開の経費は機構が負担した。大山さんの実家は、かつて「靴の街」として知られた西成区で製靴業を営んでいた。ただ、5人兄弟の末っ子、朝早く夜も遅く、休みも少ない仕事ぶりを見ながら靴に関わるのは「絶対むり」と思っていた。

卒業生の大山さん尽力 ■ 講師は第一線で活躍の職人ら

「素敵なO.Lさん」の足元を見ると、見覚えのあるパンプスを履いていた。不審に思われながら確認させてもらうと、父が作った靴だった。「身体に稲妻が走り、わくわくが止まらなかつた」。熱い思いをすぐに行動に移し、学院に入学。最初に手作りしたパンプスは母に贈った。26歳で独立を果たし、年商が4億円近くに達したこともある。

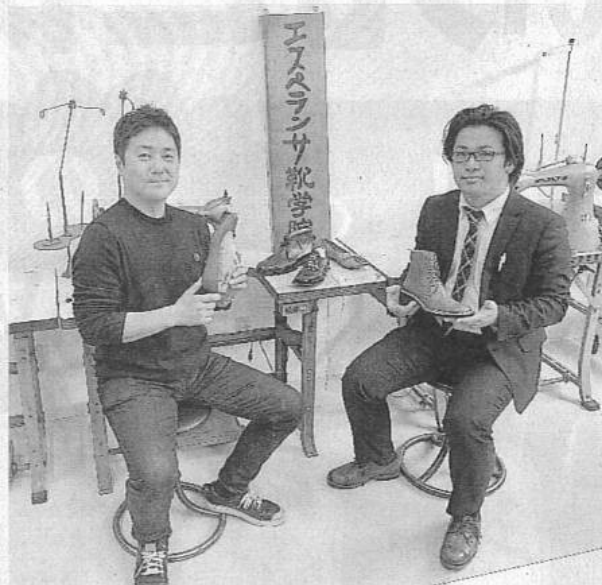
「正直1年学べば靴は作れるようになるが、すぐ食べられるほどには甘くはない。でも、自分はどうなりたいか方向を定め、そこに近づくと足場は作れる」と大山さんは語る。

再出発にあたり、ものづくりだけでなく、自立することを重視してビジネスコースを新設。経営学やマーケティング、SNSを利用したセルフプロデュースの方法なども学べるようにした。大山さんは学院長に就任し、約20人の講師はいずれも第一線で活躍する職人や個人事業主らだ。

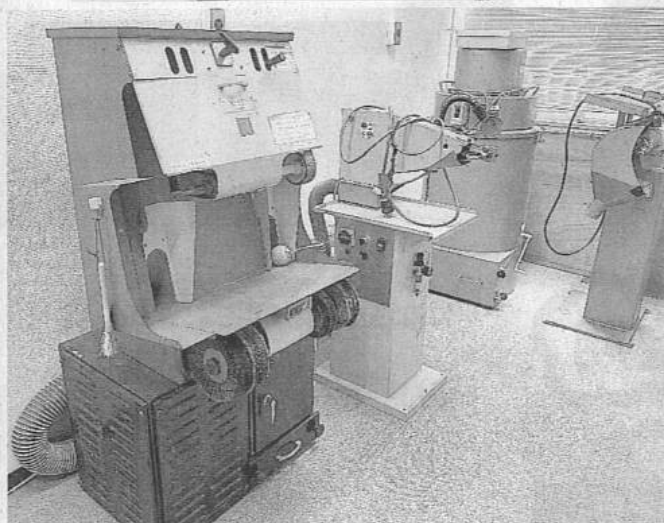
「靴の世界は、一発当たれば大逆転も可能。コロナ禍で世の中の価値観が激変した時代だから、新たなチャンスもある」と大山さんはみる。

Aワーク創造館は、江戸から明治まで全国有数の皮革集散地だった旧渡辺村に近く、周辺では革靴づくりが盛んだ。靴業界の人材養成に携わり、学院の運営を担当することになった機構の梅山晃佑さん(39)は「靴作りを目指す若者が集まることで、衰退傾向にある地場産業の刺激になれば」と期待する。

受講生8人でスタートするが、追加募集もしている。問い合わせは同館(06・6562・0410)。(武田肇)



再出発するエスペランサ靴学院の学院長に就く大山一哲さん(左)と運営を担う大阪職業教育協働機構の梅山晃佑さん



東京・浅草から移動した靴作りに使う機械=いずれも大阪市浪速区